琵琶湖沿岸域の社会・文化に関する文献レビュー

龍谷大学大学院政策学研究科博士課程
片桐　悠
龍谷大学政策学部・准教授/里山学研究センター・研究員
清水万由子

１．本稿の目的

本稿は、琵琶湖沿岸部の生活・生業にかかわる社会的・文化的な側面についての先行研究を整理したものである。琵琶湖周辺に関する研究はかねてより盛んに行われており、研究対象として資源利用・管理や生業活動、マイナーサブシステンスを扱ったものなどがあり、学問領域としては環境政策論、景観保全論、生活文化論、生態学、地理学、民俗学、社会学など多岐にわたる。

琵琶湖に関する研究は、ある１つの自然環境（水域）に関する研究という意味では、社会科学・人文学に限ったとしても例外的な蓄積を誇ると言ってよいだろう。そのすべてを吟味することはできないが、何に関心が向けられ、どのようなアプローチがとられてきたかといった一定の傾向が明らかになれば、今後の琵琶湖に関する社会科学・人文学研究の方向性を考える際の手掛かりになるだろう。

本稿では、大槻（1991）の言うところの「水界」、つまり「人々と関りを持っている水のあるところ全て」に関わる研究群の中から琵琶湖沿岸域の社会的・文化的な側面に注目した研究を対象とし、主に1990年以降に書かれたものを「生業・生活」、「調査・政策」、「里山・里湖景観」の３つの視点に分けてレビューを行った。それぞれの研究群が、琵琶湖沿岸域の暮らしや生活の変化をどの様に捉え、何を論じてきたのかを整理する。

２．各研究群のレビュー

2.1　琵琶湖沿岸域の生業・生活

琵琶湖の漁撈活動から見たものに大槻（1991）、大槻（1998）、卯田（2001）、卯田（2005）がある。大槻（1991）は、琵琶湖岸に位置する知内における村人の漁撈活動と水界との結びつきの変容を明らかにしている。第二次世界大戦後の漁業制度改革により水界の分断が始まり、村人の大半が漁撈活動に関われなくなり、知内の人々にとって水界は生活や意識から程遠いものとなった（大槻，1991）。また大槻は、現代資本主義体制のもとで行われる漁撈活動、特に沖島での漁師の生活と環境の関わりについても考察を行った。沖島の漁師には、自らの生活のために資源として働きかける自然と、ほとんど働きかけを放棄する自然の２種類の自然がある。そこには自然を徹底的にコントロールしようとする意志はなく、獲れなくなった漁獲資源や価値が低いものに対しては働きかけをやめ、他の対象に働きかける。そのため、そこに資源

の保護回復という視点はなかった（大槻，1998）。卯田（2005）は、沖島と堅田の漁民が有害外来魚駆除に対しての働きかけを、漁民を取り巻く社会・経済システムの違いから明らかにした。沖島の漁師達は漁獲物を全て同じ場所に水揚げし、そこの指示のもと漁撈活動を行うので駆除事業にも参加しやすかったのに対し、堅田の漁師達は個別に行商人や流通業者と取引関係を持っていたため、駆除事業に参加する事が難しかった（卯田，2005）。また、卯田は沖島の漁師の山アテの呼称から漁撈活動において船上でどの様に陸地景観を認識しているのかも明らかにしている。漁師は陸地景観に対し全体から部分へと視認範囲を絞り込みながら、船舶の位置をより正確に定位し、山アテの呼称として身体や道具といった身近なものを連想しながら簡易に認識し、「山」型には「もの」的表現を「崎」型には「こと」的表現が多くなされるなど、呼称表現の違いが生じている事がわかった（卯田，2001）。

古代より漁撈活動が行われてきた琵琶湖であるが、かつては「殺生禁断」や「放生」儀礼に絡む習慣や「禁漁場」が設けられていた（嘉田ほか，2001；鎌谷，2013）。「殺生禁断」や「放生」といった習慣は、神道的な不浄観が仏教的な罪の思想と結びつき制度化されたもので、それらの習慣をもとに「禁漁場」が設けられたと考えられる。「禁漁場」は最初こそ宗教的なものであったのだが、近世頃から領域支配的なものに変化した。とは言え、これにより近代的な資源管理制度が導入されるまで琵琶湖独自の生態系は守られてきた。だが、現代社会では「殺生禁断」や「禁漁場」の概念はほとんどど残らず、「放生」や「供養」といった文化が一部で残っているだけである。

堀越（1999）は琵琶湖周辺の食生活について言及し、閉ざされた生態系の中で独自の進化を遂げた魚介類を獲るために琵琶湖では40もの漁法が開発され、そこで獲れた魚から琵琶湖独特のナレズシ文化が形成されたと述べている。ナレズシには各家庭の流儀があり、ハレ食や神饌にも用いられてきた。このナレズシを作るための漁撈活動に用いられる道具について研究を行ったのが佐野（2011）と西川（2002）である。佐野（2011）は、琵琶湖を代表する漁法であるエリを用いた漁法の発達について考察している。エリとは、湖沼河川の浅い水域に設けられる定置性の陥穽漁法であり、全長１kmにも及ぶ大型かつ精巧なエリは、琵琶湖にしかみられないものとされてきた。これは、琵琶湖の地底条件に加え琵琶湖固有種の生態学的条件に対応した事や数回の技術発展があった事が理由として挙げられている。西川（2002）は、ヨシの様々な利用方法や歴史を紹介しているが、エリやヤナについても触れており、ヨシで編んだエリは中が非常に明るく魚の入りが良かったが１年しか利用できなかった事、中国にも似た漁法があるがヨシでのエリ漁は日本独自のものである事、弥生時代にはヤナ漁が行われていた事等を紹介している。また、著者の実家はヨシの卸売りを行っていたため、ヨシの生産に関わる年間作業や仕事の手順等にも触れられており、ヨシの利用や歴史についてかなり詳しく言及した著書となっている。ヤナ漁について生じた利害対立とその社会的背景について考察した伊藤（1991）は、伝統的な漁法が守られてきた背景として「琵琶湖の自然条件に適合した漁法、言いかえれば、合理的な漁法であったからといえよう。しかも、漁法だけでなく、漁具の資材についても、たとえば、エリの資材が竹・ヨシからできているように地元で入手可能な材料をつかっていた点もその理由であろう」と述べ、近年の「琵琶湖総合開発」によりこれらの伝統が失われる事を危惧している。

漁撈活動により得られた魚は沖島のように一ヶ所に集めて加工・販売される事もあれば、堅田のように漁師と付き合いのある流通業者によって各家庭に販売される事もある。かつて、琵

琵琶湖の北部には「ボテフリ」と呼ばれた魚行商人が存在し、主に農村地域を中心にその日獲れた魚を行商していた。「ボテフリ」は現在、車での移動販売や村にある昔ながらの小売商店として形を変えながら残っている（鷭，1994）。

また、琵琶湖は漁撈活動だけでなく舟運の主要経路としても利用されていた。出口（1994）によると、かつて「キタブネ」と呼ばれた船頭が湖北地域と大津や近江八幡を往復し、瓦や薪柴を運んでいた。だが、都市経済生活の変化から水辺と人々の多様な関係が途切れたため、舟運は衰退していった。

琵琶湖沿岸域の住居に注目したものとして山崎（1999）がある。山崎は琵琶湖周辺の住居の特徴を地形や気象条件といった風土や生業から違いが生じた事を示し、近年では生活の近代化により住居も均質化しつつあり、新しい住居も含めた琵琶湖の住文化を継承する必要を述べている。

また、松尾らは伊庭内湖を中心に周辺集落の古老に対してヒアリング調査を行った結果、同じ内湖周辺の集落であっても、内湖と集落の位置関係や漁業権や田舟の有無等の違いによって、人々と内湖の関わり方に違いがある事を明らかにした（松尾ほか，2007）。

2.2　琵琶湖沿岸域で行われた調査・政策

琵琶湖沿岸域の住民が水利用や水環境の変化に伴って自然をどのように認識しているのか、またそれが政策や活動にいかにつながるかという観点から行われたいくつかの研究がある。

嘉田（1991）や古川（1991）は、琵琶湖岸から概ね２km以内の342の自治会長を対象にアンケートや聞き取り調査を行い、水道水の導入により人々が水の「流れ」に対する関心を失い、それまで伝統的に利用されてきた川や井戸、湖が使われなくなり、それらの利用とセットになっていた用排水システムも川の排水路化や内湖の消滅で崩壊した事を明らかにしている。さらに、生活の実利性が追求される様になった事で、地域の個性に応じた用排水のつながりに対する認識も失われてしまったので、今後は現代社会の中でいかにして伝統的心性を生かして再構築するかが課題であると述べている。

新玉（2008）は、人と二次的自然の関わりを「琵琶湖お魚ネットワーク」を事例に、市民参加型調査で情報を収集した。市民参加型調査とは、専門家だけでなく地域に最も詳しい情報を持つ地域住民の参加のもと行う調査で、個人で行う研究とは異なり大量の広い地域のデータを解析する事が可能である。ここでは、琵琶湖お魚ネットワークの参加型調査を契機に滋賀県内で形成されたネットワークの例が紹介されており、参加型調査の社会的意義が確認されている。

中小都市圏での自然再生に対する地元住民の意識構造の解明に取り組んだ高橋らは、近江八幡市西の湖周辺でアンケートとインタビューを行い、地域住民にとって象徴・アイデンティティと感じられる動植物が、自然環境保全への動機付けとなっている事を明らかにした（高橋ほか，2013）。また、新玉らは、高島市内の歴史的文化背景と年齢構成や居住年数といった社会属性が似ている隣接する３集落（針江、深溝、藁園）で、水環境や保全活動に関する意識・行動についての比較アンケート調査を行い、ボランティア団体が行う環境保全活動が地域住民の意識にどの様な影響があるのかを考察している。保全活動への参加について、針江では環境ボランティアを中心とした保全活動に関する「呼びかけ」があった分だけ他の２集落より高かった事が明らかになった（新玉ほか，2009）。

行政としてこうした住民参加型の調査をどのように活かすのか、という問題意識から、嘉田

らは生活環境主義に立脚した治水政策である「流域治水」を標榜している。地域住民からのボトムアップで議論を展開し、縦割り行政の意思決定の困難さを克服しようとしている。その上で、地域に長きにわたり蓄積された治水文化に学び、実行可能な治水の選択肢を増やすための仕組み・制度を用意する事が、滋賀県の流域治水であるとしている（嘉田ほか，2010）。

平山らは、滋賀県における世論調査の結果の属性割合を分析する事で、琵琶湖を含む滋賀県の水環境に対する県民世論の長期的変遷を把握する事を試みた（平山ほか，2011）。平山らによると、県民は水環境を守る施策に対する満足度が高いものの、今後更に琵琶湖の保全施策に取り組むべきと思っており、実際に活動を行う県民の割合も増えてきた可能性が高く、今後もこの割合は上昇すると予想されている。また、佐々木らは、琵琶湖河川レンジャーの活動報告書の分析から住民と河川行政との連携のポイントを明らかにし、河川レンジャーが情報収集を各課の担当者へ行う事が、住民と河川行政の連携に大きな役割を果たすとした（佐々木ほか，2008）。

2.3　琵琶湖沿岸域の里山・里湖景観

ここでは里山・里湖景観を「保全」、「所有・利用」、「経験」の３つの視点から考察する。

琵琶湖沿岸域における里山・里湖景観の保全について論じた研究としては、嘉田（1996）や佐野（2003）、佐野（2008）、横張ほか（2009）などの研究がある。嘉田（1996）は、村落の保全機能（人間・作物・領土）を踏まえながら、領土の中の「水」に焦点をあてて村落が果たすべき保全機能について、マキノ町知内の例を引き合いに社会組織や生活文化の面から論を展開している。嘉田によると、これまでの農村整備には生産や機能重視といった「男の論理」が優先されてきたが、今後は水の持つ多義的な世界観を見直し多様な主体の関りのもと、農村景観の中に埋め戻す必要があると述べている（嘉田，1996）。

佐野は、歴史地理学的手法を用いて、琵琶湖沿岸域の入江内湖を対象に、主に近世以降の景観から地域住民の生業活動と内湖の環境変化を分析を試みている。入江内湖の生態的環境とその伝統的環境利用システムは、昭和初期の水位低下に伴う生物資源の減少と、半農半漁の生業形態から専業的活動への変化を契機にして崩壊した事を明らかにし、多様な価値を持っていた内湖が「農地への転換」という単一の価値観へと集約された事が、内湖の干拓促進につながったと指摘した（佐野，2003）。

横張らは、近江八幡のヨシ原の面積の分布変化から、水郷地帯の伝統的景観であるヨシ原も時代の社会状況に合わせて大きく変容してきたことを論じ、農村景観の保全は懐古趣味ではなく、創造的な行為として認識する必要があると述べている（横張ほか，2009）。「里湖」と呼ばれる琵琶湖の水辺景観は民俗文化の豊かさと深く連動しており、水辺景観を構築してきた生業技術は、今後の水辺の保全・生態修復にも応用可能であるという指摘もある（佐野，2008）。

しかし、水辺景観の保全・再生は、地域住民の生業・生活の技術だけでは実現が難しい。例えば、水辺の生業技術を持つと考えられる内水面漁業を行う漁師の中には、外来魚駆除の補助金に頼らざるを得ない者もいる。一方で、外来魚を釣りという形で楽しむ遊漁者もおり、漁業者だけが努力をしたところで外来魚問題は解決するわけではない。遊漁者も含む多様な地域住民と関わる形で外来魚駆除を進める事で、生態系や水辺景観を保全・再生することが必要になる（山内ほか，2013）。

里山・里湖景観の所有・利用については、藤村ほか（2006）と嘉田（1997）、遊磨ほか

(1998) をここでも引用する。藤村らは琵琶湖北岸に位置する西浅井町の岩熊集落でのヨシ帯をめぐる社会関係について考察している。内湖の周辺に存在するヨシ帯には岩熊の人間の総有感覚が潜んでおり、この感覚は近代的所有制度が施行された今日でも、琵琶湖沿岸各地の人々に残っていると報告されている（藤村ほか，2006)。

嘉田は余呉湖周辺で行った調査から、「共有自由資源」「共有契約資源」「共有制限資源」「私有資源」の４つの資源タイプが同一空間に重層的に折り重なった資源利用形態である「重層的資源利用」が行われている事を明らかにし、そこでは「所有」よりも「利用」が重視され、「労働（働きかけ)」と「資源の循環的利用」の中で村落生活を維持しようとする生活保全の原理が働いている事を明らかにした（嘉田，1997)。また遊磨らは、余呉湖周辺の川並集落の調査から、生活の中で余呉湖周辺の土地に対して働きかけ続け（時には過度とも言える資源利用もあったが)、余呉湖周辺の環境を維持してきたと述べた。だが、現在は余呉湖下流域での整備により、生活場面のほぼ全てで湖との付き合いがなくなり、水系環境や生物に対して影響が出た事が判明した（遊磨ほか，1998)。

最後に里山・農村景観とそれを形成する人々の内面世界（経験）について、環境社会学の生活環境主義および経験論の立場から論じた研究としては藤村（1994)、柏尾（2014)、嘉田ほか（2000)、堀内ほか（2009)、牧野（2009）がある。藤村は、日本の伝統的な「むら」に生きる人々が周囲の自然をどの様なものとして経験しているのかを、西浅井町岩熊集落を事例に明らかにした。藤村によると、岩熊では人間関係が成立する範囲内の全ての空間が「公」であり、その上に様々な濃淡を持った「私」が塗られているとし、自然は社会生活から切り離して経験されるのではなく、人との関係の強弱（濃淡）に基づいた距離を持ち、自然と社会生活の明確な境界線は存在しないとした（藤村，1994)。柏尾は、野洲市の集落にて環境配慮的な農業（魚のゆりかご水田プロジェクト）が、どのようにして非農業者を含めた集落の「暮らしの中」に入る事ができたのか、「記憶」をキーワードに検討した。暮らしの中に当たり前に存在していた「魚」を環境指標とし、集落の中に圃場整備前の「楽しく、嬉しく、心がわくわくする様な記憶」を喚起できた事がポイントだったと述べている（柏尾，2014)。嘉田らは、この様な「記憶」について琵琶湖周辺の３世代にわたって「水辺の遊び」を切り口に調査した。水辺空間の変遷により現代の子供たちが水辺で遊べなくなり、安全ではあるが面白くなくなってきている事に対して疑問を呈している（嘉田ほか，2000)。堀内らは、大津市八屋戸地区の森山集落で面接形式での聞き取り調査を行い、かつて、里山の空間や資源が子供の遊びの中で多様な利用がされていた事を明らかにした（堀内ほか，2009)。また、琵琶湖周辺の住民参加におけるヨシの半栽培という伝統の継承性を検討した牧野（2009）は、ヨシの利用の仕方は地域毎に特色が異なり、その利用の度合いや手入れの方法も異なっているため、ヨシの様な身近な自然を守る活動に必要とされているのは、科学的知識に基づいたマニュアル化された活動ではなく、自分達の生活を良くするために必要な関わり方を問い続ける事であると述べている。

３．考察

各研究群のレビューから明らかになったことは、以下の諸点である。

第一に、琵琶湖沿岸域における人と自然の濃密な関わりを示す多くの習慣、儀礼、技術等の民俗文化の存在と、その変化である。地域ごとにこまやかに異なっていた民俗文化は、主に第二次大戦後、とくに高度経済成長期に変化が始まったという認識が共通して見られる。変化の

契機は制度改革、生業活動の専業化、生活様式の近代化（西洋化）と均質化などが指摘されている。世代交代を重ね、今後は高度経済成長期以降に生まれ育った世代が大半を占めるようになっていくが、琵琶湖沿岸域の生業・生活はどのような変化を遂げるのか、その兆しを丁寧に捉える必要がある。

第二に、陸路では240km以上にも及ぶ琵琶湖沿岸域の各地域が、多様性を持ちながらも琵琶湖への接続という点で共通性・一体性を持つという認識が見られることである。そのことは、滋賀県という一つの政策主体が治水・利水のあり方や農業のあり方などを考える際の基本となっている。したがって、政策形成過程はボトムアップ的にならざるを得ず、参加型調査や地域ごとの取り組みを起点とした過程となる。一方で、どの地域に暮らす人々も水を介して琵琶湖と接続しているということの意味は、十分に深めて論じられていない。

第三に、今後の景観の保全・再生における新しい里山・里湖文化形成の重要性である。琵琶湖沿岸域における生業・生活を通して人々が形成してきた文化（技術、習慣、規範、意識など）が、里山・里湖景観の形成においてきわめて重要な要素であることは、文化的景観の議論などを見ても共通理解と言ってよい。しかし、失われつつある人々の営みと景観をどのように保全・再生するのかと問うた時、昔の生活に戻ることを住民に求めることは現実的ではない。しかし物理的な景観を標本的に保存することは、本当の意味で景観の価値を継承することにはならない。そこには新しい文化の形成と発展が必要であり、それは里山学研究センターが構築しようとする“Satoyamaモデル”の重要な要素でもあると筆者は考える。

琵琶湖沿岸域で様々に取り組まれている活動が、人々と自然との関係をどのような仕組みで再構築しようとしているのか、そこにどのような里山・里湖文化と言うべきものが生れているのかを丹念に見出していく研究が必要であろう。

参考文献

伊藤康宏（1991）「漁場相論―簗の漁業史」鳥越皓之，嘉田由紀子 編『水と人の環境史琵琶湖報告書』株式会社御茶の水書房.（pp.87～124）

卯田宗平（2001）「琵琶湖における船上からの陸地景認識に関する研究」『ランドスケープ研究：日本造園学会誌』64（5）（pp.751～754）

卯田宗平（2005）「環境問題と環境民俗学―「地域」環境問題から地域を読みなおす視点―」『地域政策研究（高崎経済大学地域政策学会）』第７巻第３号（pp.1～15）

大槻恵美（1991）「水界と漁撈―農民と漁民の環境利用の変遷」鳥越皓之，嘉田由紀子 編『水と人の環境史琵琶湖報告書』株式会社御茶の水書房.（pp.47～86）

大槻恵美（1998）「現代の自然―現代の琵琶湖漁師と自然とのかかわり」『季刊人類学』19（4）（pp.186～211）

柏尾珠紀（2014）「環境配慮的な農業を支える田をめぐるむらの記憶―滋賀県琵琶湖畔の農村集落の調査から―」『滋賀大学環境総合研究センター研究年報』vol.11 No.1（pp.33～43）

嘉田由紀子（1996）「村落社会と水環境問題への文化論的アプローチ」『農業土木学会』第64巻第１号

嘉田由紀子（1997）「生活実践からつむぎ出される重層的所有観―余呉湖周辺の共有資源の利用と所有―」『環境社会学研究』（3）（pp.72-85）

嘉田由紀子・遊磨正秀（2000）『水辺遊びの生態学―琵琶湖地域の三世代の語りから―』社団法人農村漁村文化協会.

嘉田由紀子・橋本道範（2001）「漁撈と環境保全―琵琶湖の殺生禁断と漁業権をめぐる心性の歴史から探る」鳥越皓之 編『講座環境社会学 第３巻 自然環境と環境文化』有斐閣.（pp.47～76）

嘉田由紀子・中谷恵剛・西嶌照毅・瀧健太郎・中西宣敬・前田晴美（2010）「生活環境主義を基調とした治水政策論―環境社会学の政策的境位―」『環境社会学研究』（16）（pp.33-47）
鎌谷かおる（2013）「日本近世の内水面漁業における禁漁場について―琵琶湖を事例に―」『国際常民文化研究叢書』2（pp.15～20）
佐々木和之・仲間浩一（2008）「住民と河川行政との連携手法についての研究」『水資源・環境研究』Vol.21（pp.47～55）
佐野静代（2003）「琵琶湖岸内湖周辺地域における伝統的環境利用システムとその崩壊」『地理学会評論』76（1）（pp.19～43）
佐野静代（2008）「「里湖」研究の意義―水辺の「二次的自然」をめぐって―」『滋賀大学環境総合研究センター研究年報』Vol.5 No.1（pp.31～37）
佐野静代（2011）「近世・近代史料による琵琶湖のエリ発達史の再検討」『国立歴史民俗博物館研究報告』第162集（pp.141～163）
新玉拓也（2008）「市民参加型調査が社会に与える波及効果に関する研究―琵琶湖お魚ネットワークを事例として―」『水資源・環境研究』Vol.21（pp.35～46）
新玉拓也・広瀬幸雄（2009）「地域に根ざした水環境保全事業が住民の環境保全の意識・行動に及ぼす影響についての社会調査―高島市の湖岸集落を事例として―」『水資源・環境研究』Vol.22（pp.25～36）
高橋卓也・岩井郁次郎・竹下賢（2012）「自然再生に対する地域住民の意識構造に関する研究―滋賀県近江八幡市西の湖を対象として―」『水資源・環境研究』25（pp.57～65）
鷭理恵子（1994）「魚行商人の人づきあい」鳥越皓之 編『試みとしての環境民族学―琵琶湖のフィールドから―』雄山閣出版.（pp.99～120）
出口晶子（1994）「琵琶湖水運と陸の環境変動」鳥越皓之 編『試みとしての環境民族学―琵琶湖のフィールドから―』雄山閣出版.（pp.34～53）
西川嘉廣（2002）『ヨシの文化史―水辺から見た近江の暮らし―』サンライズ印刷株式会社.
平山奈央子・川津優貴・井手慎司（2011）「琵琶湖を含む滋賀県の水環境に対する世論の長期的変遷に関する研究」『水資源・環境研究』Vol.24（pp.13～21）
藤村美穂（1994）「自然をめぐる「公」と「私」の境界」鳥越皓之 編『試みとしての環境民族学―琵琶湖のフィールドから―』雄山閣出版.（pp.147～166）
藤村美穂・武田淳・牧野厚史（2006）「琵琶湖と有明海における水族資源の伝統的利用と変容～その１社会関係からみたヨシ帯～」『低平地研究』15（pp.43～46）
古川　彰（1991）「川と井戸と湖―湖岸集落の伝統的用排水」鳥越皓之，嘉田由紀子 編『水と人の環境史琵琶湖報告書』株式会社御茶の水書房.（pp.241～277）
堀内美緒・深町加津枝・奥　敬一・岡田加奈子（2009）「滋賀県西部の農村集落における昭和前期の子どもの遊びを通した自然資源と空間の利用」『ランドスケープ研究』72（5）（pp.673～678）
堀越昌子（1999）「ふなずしを育んできた里」滋賀大学教育学部附属環境教育湖沼実習センター 編『びわ湖から学ぶ―人々のくらしと環境』大学教育出版.（pp.104～114）
牧野厚史（2009）「半栽培から住民参加へ―琵琶湖のヨシをめぐる住民活動から」宮内泰介『半栽培の環境社会学―これからの人と自然』株式会社昭和堂.（pp.227～247）
松尾さかえ・井手慎司（2007）「伊庭内湖を中心とする小中の湖の干拓前の状況と機能、維持管理手法に関する調査研究」『環境システム研究論文集』Vol.35（pp.401～408）
山内翔太・矢嶋　巌（2013）「釣りと駆除事業から考える琵琶湖の外来魚問題」『水資源・環境研究』Vol.26，No.1（pp.1～6）
山崎古都子（1999）「くらしと住まい」滋賀大学教育学部附属環境教育湖沼実習センター編『びわ湖から学ぶ―人々のくらしと環境』大学教育出版.（pp.94～103）
遊磨正秀・嘉田由紀子・中山節子・橋本文華・藤岡和佳・村上宜雄・桐畑長雄・桐畑正弘・桐畑　貢・桐畑みか乃・桐畑静香・桐畑博夫（1998）「身近な水辺環境における「人―水辺―生物」間の相互作用

―滋賀県余呉湖周辺の事例から―」『環境技術』27（4）（pp.289～295）
横　張真・渡部陽介（2009）「農山村における文化的景観の動態保全」『ランドスケープ研究』73巻１号（pp.10～13）